

学校教育における新たな課題に対応した教員養成・研修の取組

—— 道徳教育の視点から ——

永田 繁雄（東京学芸大学）

はじめに

本年3月27日に学習指導要領の一部改正によって、道徳の時間が新たに「特別の教科 道徳」（「道徳科」と呼称）として位置付けられた。道徳の時間は昭和33（1958）年に教育課程上に特設され、道徳教育の要としての役割を果たしてきたが、必ずしもその実施状況は十分ではなかったと言われる。その授業に対して教師の中に一定の忌避傾向があり、一方で、その時間数を確保しようとする力が、やりやすい授業としてのマニュアル化を促して、授業の形骸化、さらには硬直化を招いてきたとも言われる。その中で、「義務教育に関する調査」（文部科学省、平成17）などによれば、児童生徒にとって、道徳授業は上の学年・学校段階ほど好きになれない学習の筆頭とも言える状態になっている。

今次の学習指導要領の一部改正では、道徳教育の目標がより明瞭になり、「特別の教科」としての道徳科も、道徳的諸価値の基礎的な理解を踏まえて多面的・多角的に考えを深めることなどを目標として示し、授業スタイルとしては問題解決的な学習、社会的な課題に向き合う学習などが強調され、多様な教材の導入もうたわれた。いわば、道徳授業の体質改善とも言うべき方向を中核にして、より弾力的で活力のある道徳授業を展開する方向性が明確に示されたと見てよいと考える。

1 道徳授業に対する教師と学生のマイナス意識

道徳授業が必ずしも十分に行われてこなかった状況は、東京学芸大学（以下、本学）で行った調査等でも以下のように、様々に捉えられる。

(1) 学生が小中学校時代に受けた道徳授業の印象

平成25年の前期開講の全クラスの受講学生（674名）に、小中学校で受けた道徳授業について、その印象を問うたところ、次の結果が見られた。

	好きだった	やや 好きだった	ためになった	まあ ためになった
小学校	17.5%	31.3%	13.4%	35.0%
中学校	7.4%	14.4%	7.6%	21.5%

このように、小学校段階では約半数が肯定的な印象をもつが、中学校段階ではそれが激減している。また、表には示していないが、「覚えていない」と回答する学生は、小学校で9.8%であるのに、中学校段階では、上の学校段階でもあるにかかわらず21.1%と倍増している。また、資料2に示すように、道徳授業について、一部肯定的な印象も見られるが、その多くは、「国語との違いがわからなかった」「人格的に尊敬できない教師に授業されるのが不快だった」「どの意見もいい意見だね」で終わるからつまらない」「時代遅れだと思っていた」などマイナス印象でとらえられる。

本学の学生は、その多くが教員を目指し、実際に道徳授業を行うことになる。しかし、このようなイメージのまま教壇に立っても、よい道徳授業のモデルは描くことができない。道徳授業のプラスイメージをもたせることが、とりわけ重要な課題であることが分かる。

(2) 教員の道徳授業の実施状況に対する受け止め

上記のような道徳授業に対するマイナス意識は、教師の取組にも起因していることが十分に想像される。例えば、平成23年度に全国の一般校及び道徳教育指定校の教員を対象に、「道徳教育に関する小・中学校の教員を対象とした調査」を実施した。その結果の詳細は別途に譲るが、一般の小学校教員（ $n=1360$ ）及び中学校教員（ $n=1262$ ）の道徳の時間の実施状況に対する受け止めは、「十分に行われていると思う」との回答が小学校33.6%、中学校25.0%であるのに対し、「十分には行われていないと思う」は小学校66.2%、中学校74.8%に上った。その上で「十分には行われていないと考える理由」を問うたところ、その理由のベスト2は、小中学校ともに「忙しい」と「指導が難しい」という理由であった。それらを理由に挙げることは道徳授業の重要度の順位を教師自ら落としていることであり、それ自体、道徳教育の充実を阻む大きな要因になってきたと言えそうだ。

2 本学で取り組んできた道德教育充実への取組

(1) 「総合的道德教育プログラム」実施の概要

このような課題に対峙するため、本学では、大学を一つの起点とする道德教育の充実の在り方を追究することを重要なテーマとして、平成21年度より5年間、文部科学省の特別経費による研究「地域・学校と連携した『総合的道德教育プログラム』の開発」を推進してきた。ここでは、大きく三つのプロジェクトを設定して具体的な取組を行った（冊子『道德教育の未来をひらく』を参照）。その実施の概要は下の枠内のおりであり、その取組の様子や成果などは、ホームページや冊子媒体で発信をしてきている。また、終了後の今でも、その成果の活用と一部事業の継続的な実施がされている。

【本学で取り組んだ「総合的道德教育プログラム」の具体的な内容】

①第1プロジェクト……道德教育推進教員養成・研修プロジェクト

新しい時代の道德教育を担うための教員養成や現職教員研修のあり方、内容、方法などについて研究を行う。

◇小中学校教員を対象とした道德教育に関する調査の実施

◇小中学校教員対象のセミナーの実施 ◇大学の道德教育の科目に生かす教材の編集

◇大学の科目「道德の指導法」についての全国調査、本学の授業における調査 など

②第2プロジェクト……魅力ある道德教育教材開発プロジェクト

現代の課題に対応した、新しい魅力的な道德教育教材の開発について研究を行う。

◇大学や附属・地域教員などが連携した18のワーキングで教材開発の研究

◇開発教材の汎用化のための工夫や、授業などでの効果の検証 など

③第3プロジェクト……道德教育のための体験学習プロジェクト

豊かな心を育てる様々な体験学習のためのプログラム開発などの研究を行う。

◇近隣3市と連携し、6校の研究協力校を中心に進める体験学習プログラムの研究

◇大学や附属・地域教員などが連携したワーキングで体験学習プログラムの開発 など

(2) プログラム開発への取組による成果の表れ

この中にも示すように、道德授業のみならず、道德教育全体の充実に資する道德用教材を開発したり、近隣の小中学校と連携して心を育む体験活動の充実のためのプログラムを開発したりしてきた。このことを通して、少しずつではあるが次の価値ある成果を見出してきた。

◇各専門・専攻の視点から道德教育用の教材開発を試みることを通して、道德教育に対する前向きな理解が広がりを見せたこと。例えば環境教育、国際理解教育、自然科学を専門とする教員なども、教育課題に生かすための教材開発を担ってきた。

◇家庭・地域や学校等と大学との連携のもとで、社会の中でつながる道德教育のあり方を考究してきたこと。フォーラムの開催などを通して、その課題を共有するように努めた。

◇教職課程科目「道德の指導法」の実施基盤をさらに整え、その具体的な充実を図ってきたこと。

◇小中学校の道德の時間を担当する教員のために道德関連の情報を提供するとともに、教員対象のセミナーを継続的に実施して、大学が研修の一つの基点となるように努めてきたこと。

3 大学における教職課程科目「道德の指導法」の充実への取組と課題

(1) 教職課程科目「道德の指導法」の全国的な実施実態について

大学における「道德の指導法」の実実施実態はどのようなであろうか。

本学では、全国の教職課程をもつ大学に調査票を送り、「大学・短大における教職科目（道德の指導法）に関する調査」を行った（平成21年7月～9月・回答者数：363人）。その集計結果の一部を資料5に示したが、それによれば、授業を担当する講義者の傾向として次のことが浮かび上がっている。

◇講義者の約7割（263人）は51歳以上、約4割（150人）が61歳以上であること。

◇講義者の専門領域は教育哲学が最も多く（17.1%）、教育学（12.4%）が続く、道德教育を主専門と回答した講義者は10.2%であること。さらに、倫理学、教育史、教育方法、教育心理学がこれに続いている。

また、授業に際し、学習指導案の作成を授業に取り入れているのは約3分の2（67.8%）であり、実際の授業参観を取り入れているのは、物理的な難しさなどからか、4.1%に留まっている。さらに、当該科目を実施する上での課題を聞いたところ、次のような記述が目立っていた。

受講者数が多い	学習指導案の添削枚数が多い	授業時間数が少ない
教育的価値観が大きく影響する	道徳の時間のイメージが小学生止まりである	
学生自身がよいサンプルをもっていない	現場の見学をしたいが困難が伴う	など

(2) 「道徳の指導法」の計画的実施による充実

また、本学では、本プログラムへの取組に合わせて、「道徳の指導法」を担当する各教員が、共通の土台に立って授業を実施できることを優先し、そのための教材作りや、授業映像、附属学校を有することの利点の活用などを通して、その充実に努めた。

それにより、授業のシラバスを共通理解して設定し、それをもとに15回の授業を展開した。冊子『大学における教職科目「道徳の指導法」の指導モデルに関する研究』の64ページ以降に収められた東京学芸大学の事例は、本学で行われているシラバスの一般的な形になっている。

さらに、授業用の共通資料として冊子『教職資料・新しい道徳教育』を作成し、改訂を2回経て、現在、主たる授業用教材としてレジュメや各種資料とともに併用している。

ここでは、15回の前半は主に理論的・基盤的な内容、後半の主として実際の・実践的な内容としているが、そのどちらかに比重をかけようとすると時間幅の確保が難しくなることが課題となっている。また、本学では附属校の授業観察や近隣校の教員の招聘を行うこともあるが、授業観察を講義時間に合わせる難しさもあり、講義に用いるビデオも開発している。

なお、全国には、効果的な取組を進める多くの大学教員がいる。相互の情報交流を通して、「道徳の指導法」そのものの授業研究を進めることも重要だと考えた。そこで、11大学の教員と連携して「道徳の指導法」の実践事例を集約し比較交流をした。その成果物の一つが上記の冊子である。大学の授業そのものについての授業研究を進めることの意義を改めて感じさせられた。

(3) 教職科目「道徳の指導法」の実施に関する課題

現在、「特別の教科 道徳」の実施へと舵がとられていく。平成30年度より小学校段階からの改正学習指導要領の趣旨に基づく全面実施が目途となっている中、大学の道徳教育に関する教職科目においては、次のような課題があると考えている。

- | | |
|---|----|
| ① 改正学習指導要領の趣旨へと改善を図った教職科目「道徳の指導法」の展開 | |
| ② 実践的指導力を高めるための大学の授業における実施環境の整備
(例：アクティブな学習環境、受講者数、授業時間、授業見学 など) | |
| ③ 大学で指導できる教員の多様な年齢層に広げての一層の確保 | など |

上記の②では、特に、授業の実施環境における授業回数や時間幅は課題の一つであるといえる。広く道徳教育の課題などを取り上げていると、学習指導案の作成を複数回課することが難しくなり、その修正や模擬事業の実施などが難しくなる。授業者による重点の置き方の違いもあるが、行うべき授業内容を授業回数内に収めることの難しさが聞かれている。

昨年秋の道徳教育の充実に関する中教審答申（平成26年10月）では、「大学の教員養成課程における道徳教育については、理論面、実践面、実地経験面の三つの側面から改善充実を図る必要」があると示された。方法としては、例えば、道徳教育全体の在り方を扱う科目と道徳科の授業の具体的な指導法を扱う科目に二分する方法や、既定の教職科目に加えて、関心のある学生が一層深く学ぶことができる道徳教育の選択科目を設置する方法、教育実習における道徳授業を担当させる機会の拡充など、具体的、実体的な充実が必要になると考える。このような選択肢の拡充によって、高等学校段階の道徳教育に関する科目について視野に入れることも、より可能になると思われる。

4 教員の道徳教育研修の場の提供と道徳授業改善への意識の昂揚

(1) 学校の道徳授業の実施実態の把握と情報の提供

小中学校の道徳授業の実施上の最大の課題は、授業自体がアクティブな学習になり得ていなかったことである。むしろ、道徳を教えるという身構えから、問題追求、課題追究などの授業形態を避ける傾向もあった。今次の改正学習指導要領が示すように、道徳授業も児童生徒の主体的な問題の追求が見られる能動的かつ活動的な授業へと一層の質的転換を図っていかなくてはならない。

教師は道徳教育の充実に関してどの程度、多様な発想を持っているだろうか。

前述のように、本学では、全国の小中学校教員を対象に、「道徳教育に関する小・中学校の教員を

対象とした調査」を実施した（平成23年度）。資料3は、その調査において、「道徳の時間の充実に対する考え」を5択で尋ねたものの結果である。質問項目の中には、「学級の間関係をもっと取り上げるべきだ」のように、道徳授業として必ずしも適切とは言えないものもあえて含まれているが、ここから分かるように、道徳授業の一層の改善に対する意識の傾向は一定程度見て取ることができる。多様な教材の使用、多様な学習方法の取り入れなど、道徳授業の平板化や形骸化から抜け出すための意識が強く見られるものもある。しかし一方で、複数時間の指導や、重点的な学習の指導への意識が必ずしも高くないなど、週1回ずつ完結してやりやすい閉鎖的な授業感覚にとどまって、開発的な発想がもちにくいことも傾向として感じられる。

(2) 授業改善を軸とした学校教員対象セミナーの計画的な実施

本学では、小中学校教員が特に現職研修を様々に行う夏季休業期の8月に毎年、「道徳授業パワーアップセミナー」を開催しており、当日は道徳授業作りに課題や関心をもつ多数の教員が本学に訪れる。本年度の8月にも第6回の開催を予定している。その開催テーマは、常に道徳の授業改善の問題であり、複数の開発的な授業実践事例を必ず交えるようにしている。道徳の教科化時代を目前とした今、より明確な趣旨で行う必要を感じている。ただし、セミナーには多彩な希望が寄せられるが、マンパワー等の問題から対応し切れていないのも実態である。

(3) 道徳の「特別の教科」化に関する教員研修等の課題

道徳教育の充実に関して、教育研修の視点から今、考えられる課題としては次の点が挙げられる。

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none">① 道徳の「特別の教科」としての趣旨を理解し実践に生かすための計画的な研修② 校内研究や地域研究の充実のための道徳教育に関する研究委嘱事業等の充実③ 柔軟な発想力とリーダー性を備えた道徳教育推進リーダーの養成 など |
|--|

道徳授業に実施については、次の二つの大きな力が働いている。

一つは、今まで地道に進めてきた授業をきちんと進めることこそが重要だとする考えである。

二つは、道徳授業をより動的なものへと抜本的に変えていくことが必要だとする考えである。

確かにこの両者ともに大切だ。しかし、現実には、道徳授業研究に習熟してきた道徳教育リーダーが前者の考えに立つ場合が多く、柔軟で開発的な授業展開を阻む力が働いてしまう現実をしばしば見掛けてきている。教育委員会が行っている研究員制度なども、地域独自の道徳教育論を踏襲する形式的な研究を進めることに留まる事例も見られ、道徳授業の活性化のブレーキになることもある。

上記の①については、先の道徳教育の充実に関する中教審答申（平成26年10月）でも触れているように、全ての教員が「特別の教科 道徳」に係る多様な指導方法の開発・実施などに関する必要な支援を得る環境を整備することが求められる。また、③についても、柔軟な発想に立ち、指導力を発揮できる道徳教育推進リーダーの養成のための講習や研修等の充実が必要になると考える。

5 道徳教育充実のための更なる課題

(1) 中学校段階の教師の専門的な指導力の確保

道徳授業の問題は小学校段階と中学校段階で異なる様相を示している。中学校段階では、生徒の多くが思春期を迎え、人間関係に深い悩みをもつことも多いことなどから、道徳授業の困難さが増幅する。時に、生徒指導と区別のつかない指導や社会性プログラムの方法を取り入れるだけで良しとするようなその特質から外れた指導が目立つこともある。しかも、各教員が担当する自教科への思いが強く、週1時間の道徳授業に力を傾注できないまま、逆に教え込み的、一方的な授業が目立ったりする。このことから、中学校段階での教師の指導内容や方法の高度化も鑑み、その専門性の確保を図る研修等の充実及び教員養成段階での道徳教育科目の小中の差別化は重要な課題であると考えられる。

(2) 教科教育学としての道徳教育学の充実への支援

また、新しい趣旨での道徳教育のスタートを間近に控える今、道徳教育を教科教育学の一つとしての「道徳教育学」として実質的に確立させていくことも大切である。そのためには、道徳性の評価の在り方なども視野に入れ、(特別の)教科としての研究の積み上げを確保する意味からも、研究スタッフ、研究環境の充実が重要になる。既に進められている形態だが、大学と教育委員会が連携し、理論と実践の往還に資する人材の確保などによって、その環境を整えていくこともできる。

資料 1

道徳授業の実施状況に対する教師の受け止め

●「道徳教育の関する小・中学校の教員を対象とした調査・結果報告書」東京学芸大学
(平成24.2)による(結果の詳細はHPに収録)

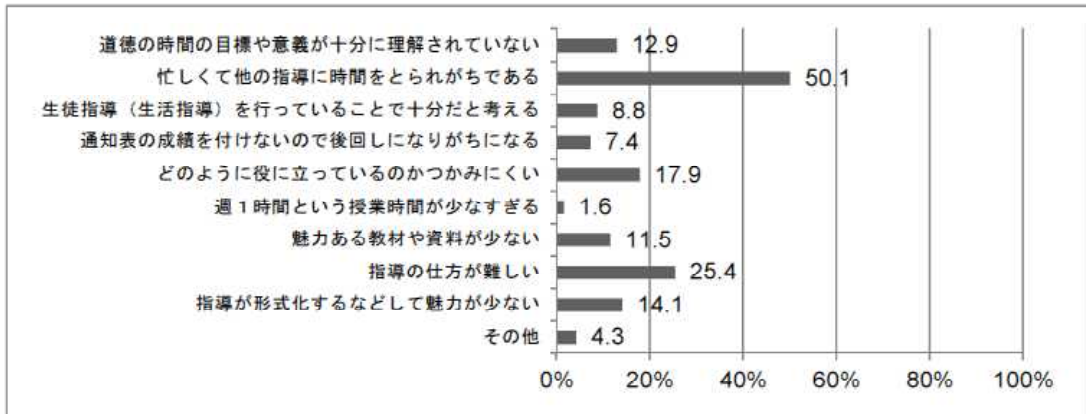
【問】道徳の時間が必ずしも十分に行われていないと言われることがあります。
広く小学校または中学校の教育全体を見たとき、あなたはどのように思いますか。

■ 実施状況に対する受け止め

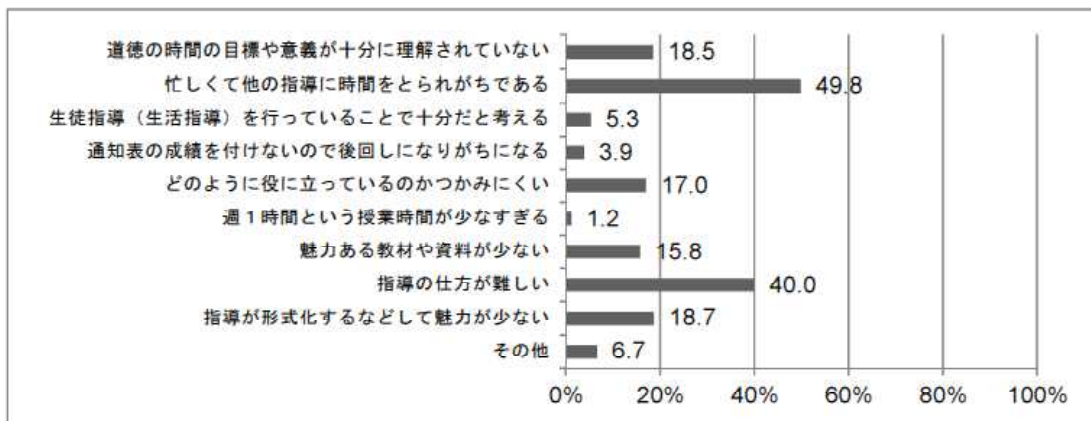
	小学校				中学校			
	一般校		指定校		一般校		指定校	
	n	%	n	%	n	%	n	%
十分に行われていると思う	457	33.6	188	29.7	316	25.0	86	25.9
十分には行われていないと思う	900	66.2	444	70.0	944	74.8	243	73.2
無回答	3	0.2	2	0.3	2	0.2	3	0.9
合計	1360	100.0	634	100.0	1262	100.0	332	100.0

【問】十分に行われていないと感じるとき、どのようなことにその原因や理由を感じますか。特に強く感じることに ついて3つ以内に○をつけてください。

■ 十分には行われていないと考える理由・小学校 [一般校の教師：n=1360・3つまで解答]



■ 十分には行われていないと考える理由・中学校 [一般校の教師：n=1262・3つまで解答]



小・中学校で受けた道徳授業の印象（学生の感想コメントより）

東京学芸大学「道徳教育の研究（道徳の指導法）」の受講学生（主として大学2年）の感想の実際から
 【特徴的なものを整理し、各感想を要約した。】

■ 授業についての全体的な印象

- 国語との違いがわからなかった
 - ・国語の授業との違いがあまり分からなかった。物語文の読み取りと何が違うのだろうと思っていた。
 - ・国語に似ていたが、国語よりも難しくなく、興味があったので楽しかった。
- 答えを探すのが難しいが楽しかった
 - ・きれいごともあったが、答えが示されず、自分たちの中から答えを探す作業は面白かった。
 - ・どちらが正しいということではなく、答えは自分自身で考えるしかないのが消化不良のときもあった。
- 先生によって取り組み方が違った
 - ・先生によって取り組み方が全く違っていった。隣の組の先生のやるのが斬新で、羨ましかった。
 - ・好きな学習だったが、人格的に尊敬できない教師に授業されるのが不快だった。
 - ・担任の先生も、イマイチ何をしようか分からない様子で混乱していることが多かった気がする。
- 他の学習に変わりがちな時間だった
 - ・運動会や合唱祭練習に充てられた。 ・総合と連動して1/2成人式をしたり自分史を作ったりした。
 - ・学級の決めごとやリクレーションにあてられることが多かった。 ・中学校の道徳の授業はなかった。
- テレビが楽しかった
 - ・テレビを見ることが楽しかった。 ・小学校はNHK教育などのTVを見ていた。
 - ・NHK番組が楽しかった。 ・テレビ番組をよく見た。お話から学ぶよりいいと感じた。
- そのほか
 - ・短編集のような本を見ていることが多く、先生の話は聞かず、他の話を読むことに夢中になっていた。
 - ・挙手して発言すると「まじめ」「いい子」と思われそうで、発言しにくかった。 ほか

■ 受けたときのプラスの印象など

- 温かく穏やかな気持ちになれる
 - ・担任の先生は、他の授業より穏やかで、お父さんやお母さんのように思えるときがあった。
 - ・話をもとにみんなで真剣に考えた。授業が終わると心がきちんと整理され、ほっこり、すっきりした。
 - ・その題材が訴える人間の温かさや生活を豊かにする生き方を感じて、すごく好きな授業だった。
- 自分と向き合うことができる
 - ・自分と向き合う時間だということの印象がとても大きい。記録を後で振り返るのが好きだった。
 - ・道徳の時間は、子どもが一番自分らしくしていただける授業なのではないかと思った。
- 議論をすることが面白かった
 - ・教材についてみんなで議論していた。良いだけでなく悪い意見も出るので、ヒートアップもした。
 - ・賛成、反対が出て、友達の意見も分かって楽しかった。ディスカッションが面白かった。
 - ・班に分かれて討論やプレゼンをすることが多く有意義だった。授業一つ一つに印象深い言葉が残った。
- 様々な人のことを考える特別な授業だった
 - ・様々な立場に立って考える授業は面白かった。ロールプレイなどがあり特別な授業の気がしていた。
 - ・自分の考えを自由に述べられるので好きだった。いろいろ考えられるので算数などより楽しかった。
 - ・特別な授業という印象だった。命について考えたりして、受け身でなく「考える」授業だった。
 - ・自分とは違う時代や性別や年齢の人物について考えるのが楽しかった。 ほか

■ 受けたときのマイナス印象など

- ▽ 先生の答えに引きずられる感じがした
 - ・先生のまとめをなるほどと思って聞いたが、用意した答えの方向に導かれていただけのようだった。
 - ・小1の授業参観のとき自信をもって答えたのが教師が用意していなかった誤答だったらしく、すごく焦った様子で対応された。それ以来、「道徳は一般的な正解を回答をするもの」と感じるようになった。
 - ・「道徳には正しい答えがない」と先生が言っているのに、答えが否定されたことが悲しく、傷ついた。
 - ・たくさんの考えや答えがあるのに、全体で1つの考えにまとめようとする傾向の強い授業だった。
 - ・子どもの頃は真っ白だから先生の意見を疑問をもたず受け入れていた。とてもこわいことだと感じた。
- ▽ 正解のようなものが見えていた
 - ・「こう書くべき」みたいなのがあって、自分の考えを押しつぶしていた気がする。
 - ・先生の考えと違うと「ふーん、次」という感じで返された。道徳ははっきり正解のある授業だと思った。
 - ・モラルや思いやりのある答えが「正解」になるため、いつも「正解」が見えてつまらなかった。
- ▽ 答えがはっきりわからなかった
 - ・結論が出ず「どの意見もいい意見だね」で終わるから、道徳はつまらないと感じた。
 - ・正解がないので難しく、好きではなかった。 ・賛否が解決することはないので嫌だった。
- ▽ 当たり前のことを言っている感じがした
 - ・常識で考えられることや、既知のことがほとんどなので、やる気が落ちていった。
 - ・「あたりまえのことしか言っていないのに…」と思いつつ授業を受けていた。
- ▽ そのほか
 - ・子どももいろいろ情報をもっているのだから、正直なところ、時代遅れだと思っていた。 ほか

資料3

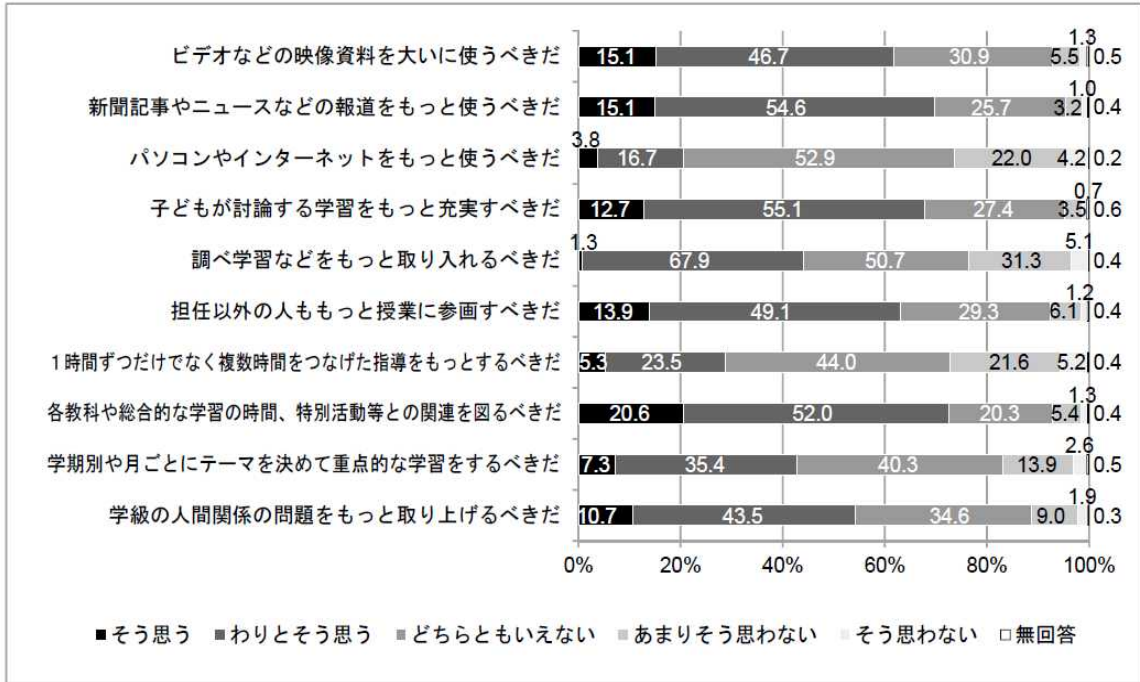
道徳授業の充実に関わる教師の考え

●「道徳教育の関する小・中学校の教員を対象とした調査・結果報告書」東京学芸大学（平成24.2）による

【問】道徳の時間の充実にかかわって、次のことについてどのように考えますか。
 あてはまるものを1つずつ選んでください。

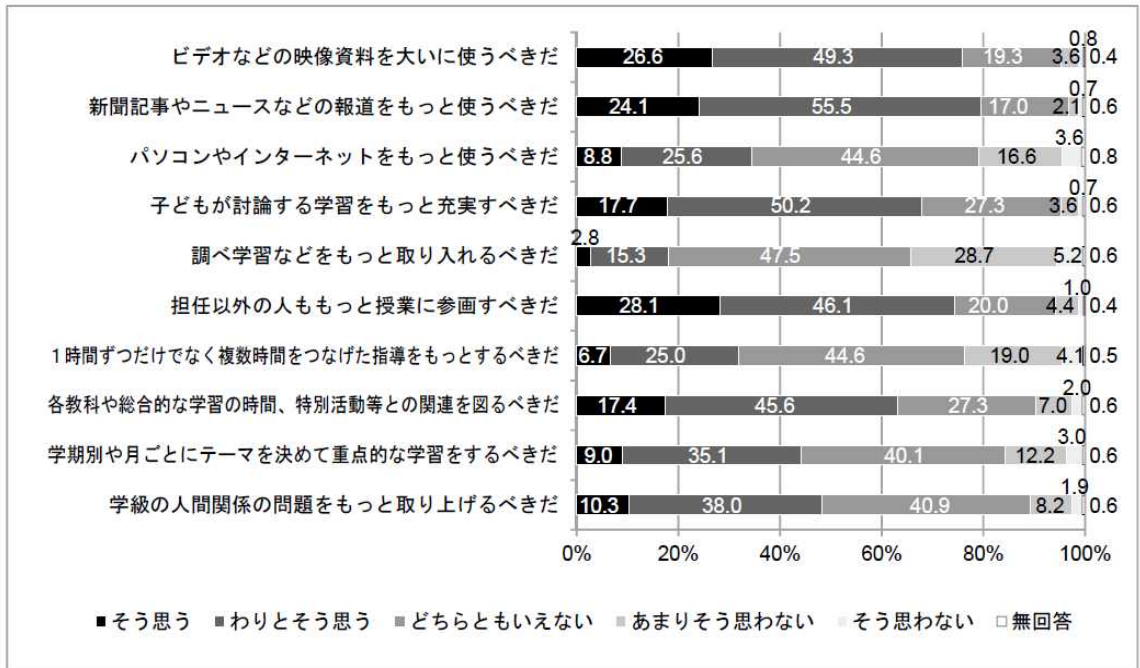
■ 道徳の時間の充実に対する考え・小学校

〔一般校の教師：n=1360〕



■ 道徳の時間の充実に対する考え・中学校

〔一般校の教師：n=1262〕

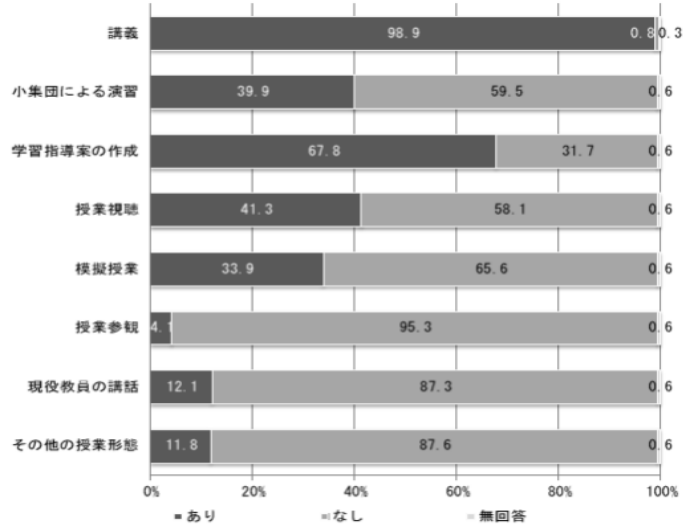


資料 4

教職科目「**道徳の指導法**」について（本学の調査より）

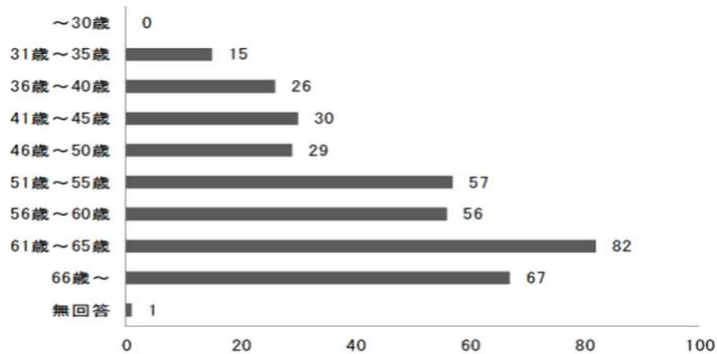
●「大学・短大における教職科目（道徳の指導法）に関する調査・結果報告書」
東京学芸大学（平成22.5）による（結果の詳細はHPに収録）

■ 授業の実施形態……問：授業の実施に際して、含まれる形式のすべてに○をつけてください。



各授業形態の実施の有無（n=363）

■ 授業担当者の年齢層



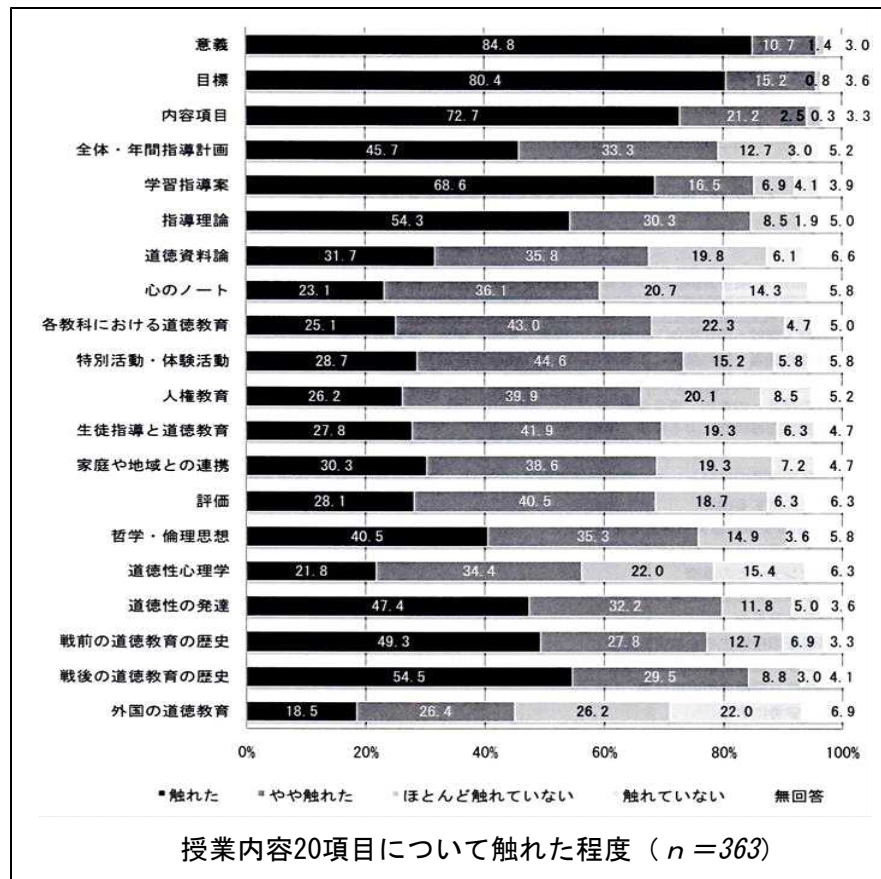
道徳の教職科目担当者の年齢（n=363）

■ 課題に感じること……問：授業を実施する上での課題はありますか。

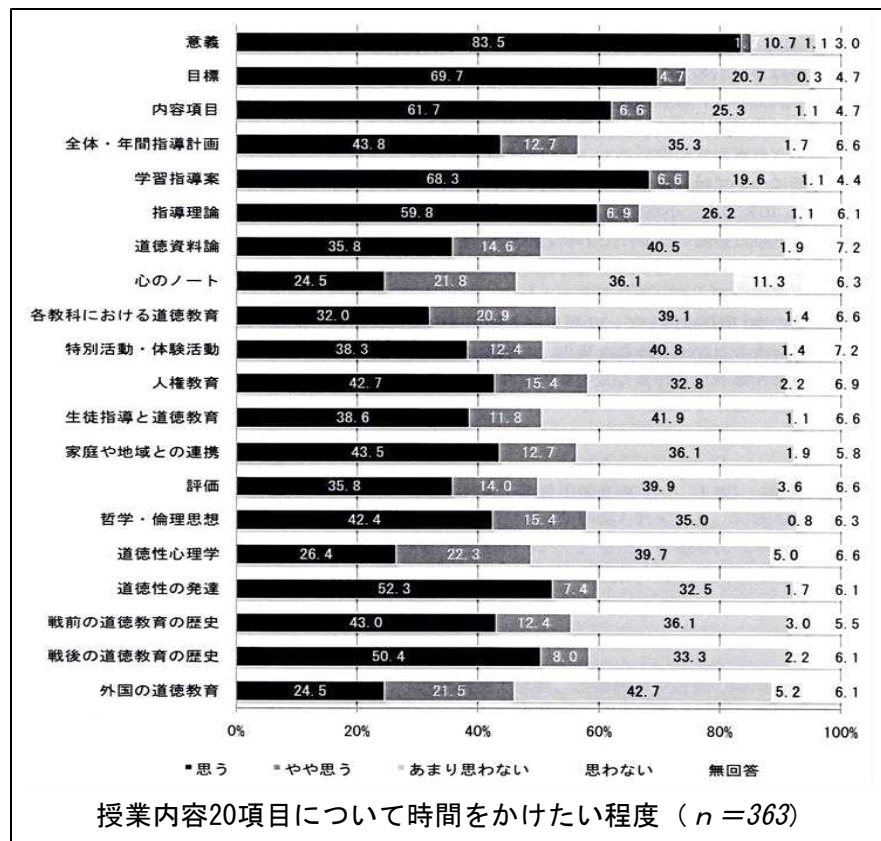
道徳の指導法を実施する上での課題（自由記述のカテゴリ）

カテゴリー	含まれる内容
講義規模	・受講者数が多い ・グループディスカッションなどができにくい
授業時間数	・時間数が少ない ・通年4単位
教員の考え	・道徳に関する考え(前問と類似) ・授業に取り組む構え ・理論と実践 ・内容のバランス
学生の意欲・態度	・意欲、モチベーションを高める ・関心の低さ ・関心のずれ ・授業参加の姿勢
経験の不十分さ	・道徳授業を受けた経験の少なさ ・学校現場の指導力 ・学生の道徳授業の記憶の薄さ
学生の能力	・理解力 ・基礎知識の不足
授業運営	・シラバスの記載 ・役割分担 ・他教科との連携 ・実施時期 ・教員養成との関係 ・教育実習との関係
授業の教材	・教材や資料の不足
現場との連携	・時間的に現場の見学ができない ・実際の授業参観が困難 ・教員を講話に招へいするのが困難
授業構成・内容と方法	・模擬授業、学習指導案、ディスカッション ・資料(教材)研究
社会的背景や行政	・現代社会の課題 ・教育行政の問題 ・価値観の多様化

■ 講義で触れた内容……問：授業中に触れた内容がありましたら、時間をかけたと思う程度をお答えください。



■ 時間をかけたい内容…問：今後、授業を実施する場合、時間をかけたいと思う程度をお答えください。



資料5

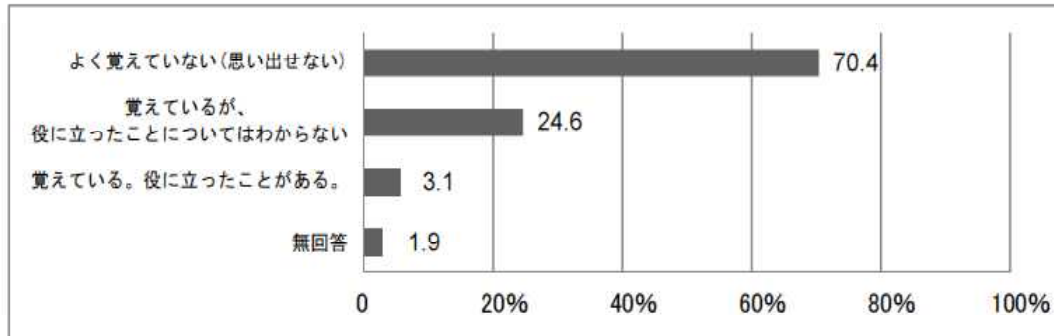
大学の道德教育に関する教職科目に対する教師の意識

●「道德教育の関する小・中学校の教員を対象とした調査・結果報告書」東京学芸大学（平成24.2）による

【問】小・中学校の教育免許取得のためには、大学の教職課程で道德教育に関する科目を履修しなくてはなりません。その科目について覚えていることがありますか。また、役に立ったことがありますか。

■ 大学在学時の道德教育に関する科目の履修

[n=3588]

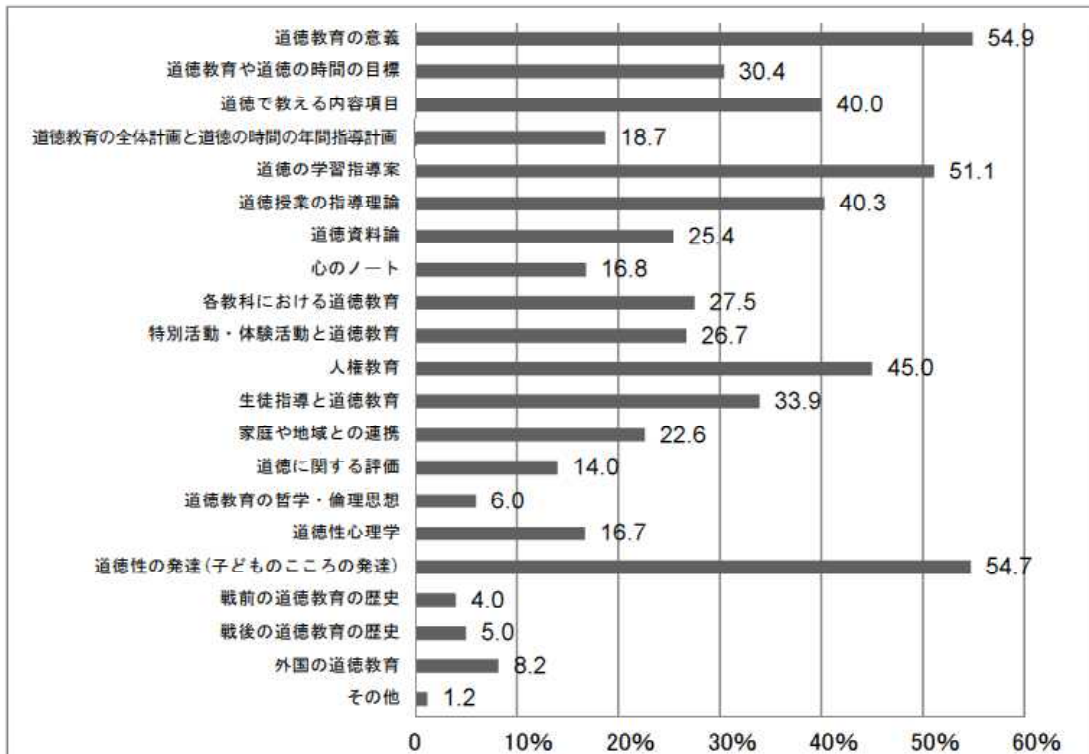


大学在学時の道德教育に関する科目についての記憶の有無 [n=3588]

※自由記述の内容は、ここでは略。

【問】大学の教職科目における道德教育に関する科目では、例えば、次のような内容が授業の中で取り上げられたりしています。これらの中で、特に重視して取り上げるべきと思う内容について7つまで〇をつけてください。

■ 道德教育に関する教職科目への期待



道德教育に関する教職科目で重視すべきと考える内容 [n=3588]